

張って学生仲間に説く、この姿が生れてでくこと、これが学生諸君への私の大きな期待であり、また私の指導如何の是非を問われる宿題であったのです。

一方学生諸君には彼等の創造活動の第一歩が始められたといえます。

それは丁度、自主ゼミ参加者が私と一年

前のこの時期に約束したものを果したことをともに喜び得ることを感謝し、学生諸君の若い力による限りない創造と飽くことのない力強い真理の探求に励んでもらうことを希って自主ゼミ担当の任を放してもらいます。

外国語自習室の開業にあたって

益 田 出

もともと外国語自習室なるものの構想は、45年に一般教育の改革案を出したとき、外国語、とくに英語の改革案をまとめる過程で打ち出されたものである。改革案の大きな柱は、学生による自由選択と自学自習ということであった。それは、大学における学問研究の多様性、英語の国際性、時代の要請、学生の質的多様性など、すでに現在の、そしてこれからの大学で求められるさまざまな要件に適合するには、従来の、テキストの講読を主体とする英語教育のみでは不十分であるという認識に立つものである。これは目新しい考えでも何でもなくて、言語および言語教育の本質に即した至極当然な認識であって、中学校から初まる英語の学習を大学まで一貫してあるべき姿に立ちかえらせようということにはかならない。大学の外国語教育では、とくにテキストの講読が中心を占めるのは当りまえであるが、それと同時に、言語活動の他の面、つまり話したり、聴いたり、書いたりする能力を養成しなければならないことも、これまた当然であろう。その中で、とくに音声面の学習は反復練習を必要とするばかりか、上達に個人差が甚だしく、し

たがって個別指導・学習の必要性が高いうえに、素材の多様性というようなこともあって、従来の形態のクラスでは十分な効果をあげえないのが実際であった。そこで外国語教育の、とりわけ音声面の訓練に多様性を与え、限られた授業時間内でなく、学生各人の都合の好い時間に自由に、いくらかでも反復して学習することができるように、思い切って機械化した設備を構想したのである。この設備によって真の成果を挙げるためには、まず周到に計画された教材を準備すること、教室の授業と関連させて教材の選択について教師が適切な指導をすること、そして何よりも重要なことは、学生が自発的かつ組織的にこれを利用することが必要であろう。設備自体は、従来のL1装置と大差のない器械からなるものであるが、主たる目的が学生の自学自習にあることから、個々のブースが別々に作動するようになっており、部屋そのものも、固苦しい教室というのではなくて、親しみやすく、くつろいだ気分が自習ができる雰囲気の一部屋に工夫してある。

先にも述べたように、この自習室は、外国語教育改革案の一環として構想されたも

のであるが、種々の事情から改革案が実施されるに至っておらず、そのために自習室本来の機能を十分に果しえないのは遺憾である。機械化した自習室が一応完成したことで、直ちに外国語教育が能率化し、成果が倍増することを期待することはできない。学生の自由選択によるクラス編成は、従来の固定クラス解消を前提とするが、これは学生側の反対で暗礁にのりあげたままであるし、授業時間の問題、時間帯の問題、ひいては学生の過密時間割の問題など一般教育のカリキュラム全体、および一部は専門教育にまでわたる種々の問題が依然として未解決のままである。これらの難問題をつぎつぎと解決し、すでに打ち出している改革案を実現するためには、当の外国語教師が意欲をもって、しかも相当な犠牲を覚悟のうえで事にあたらなければならないことは言うまでもないが、学生諸君はもとより、学内の他の教官のご理解とご協力をえなければならない。

ともかくにも自習室は今年度後期から開業した。が、何しろ学年度の半ばでもあ

り、予算的な措置もおくれたために、まだ十分な教材も整わず、時間帯の関係で利用時間の調整も思うにまかせない有様で、開業早々フル運転というわけにも行っていない。本来は自習のための装置であるが、目下のところは、主として一斉授業にあてており、同一時間帯に利用の希望が重複したりして、既設のL1教室を併用することで急場を凌いでいる。学生の過密時間割が多少とも解消し、改革案がある程度実現して、学生の間に音声面の自習を必要とする気運が高まってくるのでなければ、自習室の利用価値が真に発揮されるには至らないであろう。しかもなお、機械化した自習装置はあくまでも外国語教育の補助手段であることに変わりはない。そして、補助手段を有効に利用してこそ、理想的な外国語の教育と学習が達成されるというものである。

なお、外国語自習室の計画から設置に至るいろいろな段階で、物理学の小林先生、心理学の吉森先生、芸術学の池川先生に、それぞれご協力をいただいたことをここに記して厚くお礼を申しあげたい。

「国際教育学会」に出席して

渡 辺 英 夫

このたび国際教育学協会より「第6回国際教育学会」に招待され、総会と「表現とコミュニケーションに関する科学」の分科会の討論に参加しました。今回はカーン大学教授ミヤラレ博士を組織委員長に、会議は残暑厳しいパリ大学Ⅹ（ドーフィン校）で9月3日から5日間にわたって開かれました。共通テーマ＜基礎学問の教育学への

貢献＞を軌に、会議は5つの講演とパネルディスカッション、そして12の分科会での分野別での研究発表と討論によって進められました。参加者は54ヶ国、800余人の多数で、地元フランス、それに前回会議開催地のフィンランドからの出席者が多いのが目だち、他にユーゴ、ポーランドなどの共産圏から多数の参加があり、日本からは私を